慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	慶應義塾文学科教授・永井荷風：『三田文學』通巻800号突破を記念して：はじめに
Sub Title	Symposium in honor of Mita bungaku : Kafū, professor of Literature at Keio University : introduction
Author	末延, 芳晴(Suenobu, Yoshiharu) 持田, 叙子(Mochida, Nobuko) Bernard, Peter(Ogino, Anna) 荻野, アンナ(Tatsumi, Takayuki) 巽, 孝之
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2019
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.116, (2019. 6) ,p.137 (128)- 145 (120)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2018年度藝文学会シンポジウム「慶應義塾文学科教授・永井荷風」 開催日: 2018年12月14日 場所: 慶應義塾大学三田キャンパス北館ホール
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01160001-0137

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

2018年度藝文学会シンポジウム

慶應義塾文学科教授・永井荷風

――『三田文學』通巻 800 号突破を記念して――

日時：2018 年 12 月 14 日（金）　15:00 ～ 18:00

場所：三田キャンパス北館ホール

講師：末延芳晴（文芸評論家）

　　持田叙子（近代文学研究者）

　　ピーター・バナード（ハーバード大学大学院博士課程）

コメンテーター：荻野アンナ（本塾大学文学部教授）

司会：巽　孝之（本塾大学文学部教授）

はじめに

司会　巽孝之：本日は藝文学会・三田文学会・集英社共催のシンポジウム「慶應義塾文学科教授永井荷風――『三田文学』通巻 800 突破を記念して」にようこそお集まりくださいました。今回は『三田文学』の最新号（2018 年秋季号）の永井荷風特集にちなんだ企画となりました。というのも、私の友人である末延芳晴さんが荷風の新しい本を集英社新書として出すということは以前から伺っていたのですが、その新しい本がまさに本日（2018 年 12 月 14 日）発売されると聞いたからです。したがいまして、今日のシンポジウムには同書と同じタイトル「慶應義塾大学文学科教授　永井荷風」を冠しております。実は関根謙編集長より、ほかならぬ荷風が創刊した『三田文学』が何度も休刊しては復刊を繰り返しつつ、昨年 2017 年に通巻第 800 号を超えたけれども特に記念企画をやらないまま来てしまったと伺っていましたので、今回は遅すぎた記念企画という意味合いも込めています。

そもそも、わたしが末延さんと知り合うきっかけになったのは、1997 年に末延さんの『永井荷風の見たあめりか』という本が出たことに遡ります。同書は 1994 年、バブルの時代において一世を風靡した中央公論社のファッション雑誌『マリ・クレール』で、末延さんが健筆を振るっていた連載に基づいています。なにしろ時代が時代でしたから、同誌には相当予算があったのか、これは当時の絵葉書を潤沢に使ったなんとも豪華な連載でした。末延さん自身も 1973 年から四半世紀ほどニューヨークに滞在して働いておられた華々しいご経歴の文芸評論家ですから、披露される画像資料も見たこともない珍しいものが多かった。文学だけでなく音楽や美術など芸術全般に造詣が深く、すごい人がいるなと思っていました。この連載がのちに『永井荷風の見たあめりか』にまとまったわけですが、当時といえば、私はたまたま読売新聞の読書委員をやっていたので、連載時から愛読していたこのご著書を書評することになったんですね。それがお気に召

したのか平凡社ライブラリーから2015年に『荷風のあめりか』と改題して文庫化される際には解説のご指名をいただき、そのご縁でお会いするようになったのが今から13、4年前のことです。とはいえ、確かにアメリカという視点で永井荷風を読むのは面白いけれども、私は日本文学ではなくアメリカ文学を専攻しているものですから、一体どういう切り口で解説を書こうかと考えあぐねました。そこでひとつアイデアを思いついて、解説を「ボヘミアン・ラプソディ明治篇」というタイトルにしたんです。いま1970年代から80年代にかけて一世を風靡したイギリスのロックバンド、クイーンの伝記映画が大ヒットしていますが、実にボヘミアンというの概念は永井荷風にこそふさわしい。

そうこうしているうちに、2010年に『三田文学』の100周年記念を企画が立ち上がりまして――その時にも末延さんや亀井俊介先生に来ていただいたのですけれども――慶應義塾大学三田キャンパスの旧図書館で『三田文学』の大々的な展覧会が開催されました。その際、どうせなら面白いことをやろうということで、来場者全員に配るパンフレットに三田ゆかりの文学者のそれぞれの似顔絵を付けたらいいのではないかいうことになりました。本日のシンポジウムのポスターないしフライヤーをご覧になってすでにお気づきになった方もいらっしゃるかもしれませんが、このときの似顔絵の一つ「荷風さん」は今回の三田文学荷風特集号に寄稿してくださっているイラストレーターの伊藤優子（YOUCHAN）さんによるものです。いま書店に行くと光文社文庫の『ナルニア国』シリーズをはじめ伊藤さんが表紙を描かれた本、特にファンタジーやSFを必ずどこかで目にされると思いますが、一方で、伊藤さんは近代日本文学にも大変造詣が深く、様々な文豪似顔絵シリーズに手を染めておられる。遠藤周作や久保田万太郎の似顔絵なども本当に素晴らしいものでした。

ところで伊藤さんが描く荷風は、アメリカのロック・バンド、スパークスのロン・メイルにそっくりなんですね。私は永井荷風をロックンローラーとしてみる人がいるのかと思って感心したのですけれども、よくよく考えたら私自身『永井荷風のあめりか』の解説を「ボヘミアン・ラプソディ明治篇」と命名していたわけです。そういう経緯もありまして、永井荷風を様々な角度から読むということが最近では可能になった。

そこで本日は、いまや荷風研究の権威と呼ぶべき末延さんに基調講演をしていただき、さらに『朝寝の荷風』と特に『荷風へ、ようこそ』でサントリー学芸賞

を取られた持田叙子さん、ハーバード大学大学院で泉鏡花に関する博士論文を執筆中で、近代日本文学全般がご専門のピーター・バナードさんをお呼びしました。そして末延さんの最新刊の帯で言及されている多くの三田の文人たち――久保田万太郎、水上瀧太郎、佐藤春夫、堀口大學、小島政二郎、西脇順三郎、青柳瑞穂、原民喜、山本健吉、堀田善衛、安岡章太郎、遠藤周作、江藤淳、坂上弘、吉増剛造、村松友視などなど――の中にも名を連ねていらっしゃる荻野アンナさんをコメンテーターとしてお招きした次第です。荷風が育てた三田文学の一番新しい才能の一人である荻野さんから最後にコメントをいただくという、これはきわめて贅沢なシンポジウムとして構想されています。

それではまず、登壇者の皆さんには「荷風との最初の出会い」から始めていただきます。

末延芳晴：限られた短い時間ではとても語り尽くせないくらい、荷風との付き合いは長くて、深いですね。最初になぜ私が永井荷風の文学を読み続け、その本質を読み解くことに生涯を費やすことになったのかという点について、私自身の荷風に対する自己同化という視点からお話したく思います。つまり、私の出自というか、家族の構成とか生い立ち、さらには成長してのちの生き方が永井荷風と重なっているということが、私をして荷風文学に赴かしめたということなのです。

どういうことかと言いますと、エリート官僚でありビジネスマンでもあった永井久一郎の子として生まれた荷風は、永井家を継ぐ惣領息子で、三人兄弟の長男として生まれています。そのため久一郎は、東京師範学校附属高等中学校を卒業した荷風に、第一高等学校、東京帝国大学と、エリートコースを歩み、官僚、あるいはビジネスマンとして立身出世することを期待するわけですが、荷風はそうした父親の願いや負託を一切拒否して、一高の入学試験には失敗、仕方がなく東京外国語学校の清語科に入学するものの中退し、ドロップアウトしてしまいます。同じように、私は、戦前は職業軍人で陸軍大尉であった父親の長男として生まれ、戦後建設会社のサラリーマンとして東京で一家を支えた父親の期待を一身に背負い、国立大学に進学するものの、途中でドロップアウトして、文学の世界に入ってしまったわけです。つまり、永井荷風がそうであったように、私もまた、父親に死に物狂いで抵抗し、父親の期待をすべて裏切る形で、文学の世界に生きる道を選んでしまった。そうした父親からの遁走という本能的意志、あるい

は願望が私を支え、今日の私を作り上げたわけですが、そうした生き方が、永井荷風のそれと重なっていることが、荷風の作品を読み進めるなかで次第に見えてきた。要するに、私は、荷風に自己同化する形で荷風文学を読んできたわけで、それは私にとって自己発見の長い道でもあった。生涯を荷風の文学を読むことに費やしてしまった理由がそこにあると思います。

さてそのように荷風に自己同化させる形で荷風文学を読んできた私ですが、荷風文学との出会いは意外に遅かった。中学・高校生の頃、夏目漱石や島崎藤村、太宰治などの小節は読んでいましたが、荷風の文学にはほとんど関心がなかったですね。その私が、最初に永井荷風の文学に関心を持ったのは、私が東京外国語大学の中国語科に入学し、永井荷風が、外国語大学の前身である東京外国語学校の清語科 (中国語科) を中退していることで、私の先輩に当たることを知ってからですね。それで外語大学を卒業し、中国の古典文学を基礎から学び直したいと思い、東京大学文学部の中国語・中国文学科に入り、中国の古典文学、特に杜甫の詩を研究するようになってから、永井荷風も中国の古典文学に造詣が深いということで、荷風の小説を一通り読んだのですが、その時は永井荷風が文学を通して何を表現しようとしたのかは、わかってなかったですね。ところが、大学院の修士課程の学生だったころに大学紛争が起こり、中国文学科の研究室が封鎖されたりして、大学という学術研究共同体のなかに自分の居所が見つからなくなってしまった。それと、今のワイフと結婚したことが重なって、一度荷風のように日本を出て、外から日本を見直し、自分の生きる道を探そうという気になって、1973 年の夏にワイフと共に日本を脱出し、ヨーロッパ経由でアメリカに渡り、ニューヨークで生活するようになったわけです。

結局、ニューヨークでは最終的に 25 年間生活することになったのですが、その前半の 10 年くらい日本総領事館の広報文化センターで仕事をしていました。荷風はワシントンの日本公使館とニューヨークの横浜正金銀行の現地職員として仕事をしていましたから、現地職員の屈辱と悲哀というものを荷風とともに共有できたということ、それが荷風とその文学にのめり込んでいく一つの大きな要因となりましたね。幸いだったのは、文化センターの図書室に筑摩書房の現代日本文学全集というのが揃えてあって、そこに荷風の小説や随筆などを集めた選集本が二冊入っていたので、それを貪るように何度も読み直しました。当時、私はワイフと共にマンハッタンのイーストビレッジの床の傾いたアパートで生活してい

たのですが、昼間の領事館の仕事が終わってからは、ほとんど毎晩ロックやジャズを聴き漁り、週末はマンハッタンの北から南へ、東から西へと歩き回るという生活を続けることで、荷風のニューヨーク体験を追体験していったわけです。

そして、そうした体験を通して、自分が見たり、聴いたりしたニューヨークの実態が、荷風の『あめりか物語』に書かれてあるものと実にリアルに重なっていることが見えてきたのですね。そのころ、遠藤周作が、荷風の書いたものは全部作り話で、アメリカとフランスにいた時の日記も作り話だと書いたか、言っているのを何かで読んだ覚えがありましたが、それは違うのではないかと思った。それで、『あめりか物語』に描かれているニューヨーク、具体的にはタイムズ・スクェアーやチャイナタウン、セントラル・パーク、コニーアイランドなどを何度も訪れ、丹念に調査取材して確かめていったんですね。そうした形で現地でのみ可能な調査や研究を続け、『あめりか物語』や「西遊日誌抄」の記述が、いかに当時のニューヨークの現実をリアルに反映しているかを確かめるうえで有効だったのは、荷風がニューヨークに滞在した当時、アメリカで発行され、実際に使われたカラー印刷の絵葉書を、アンティーク・ショップやフリーマーケットなどで大量に集めることが出来たことです。きっかけは、ニューヨークで生活しながら、荷風の文学を本気で読み進めていくことを始めた当初、ワイフとセントラル・パークに散歩に行った帰り、セントラル・パークの西側を南北に走るセントラルパーク・ウェストをぶらぶら歩いていたら、フリーマーケットに行き当たったわけです。それで何か掘り出し物でもないかと物色していたら、偶然手にした一枚の絵葉書にちょん髷を結った日本人が、高い塔の上から張られた綱を、唐傘をさしながら降りてくる画像が描かれていたんですね。何だろうと思って、絵葉書をよく見ると、「Coney Island Luna Park」と書かれていた。それで、私は直感で、その絵葉書が、『あめりか』物語』のなかの「暁」という短編小説で、荷風が描いた、コニーアイランドの絵葉書であることが分かった。それが契機になって、『あめりか物語』に関連する絵葉書を夢中で集めだし、最終的には２千枚近く集めたでしょうか。ずいぶんお金も、時間もかかりましたが、そのお陰で、『あめりか物語』に対する理解が飛躍的に高かまった。そして、そのことが日本帰国以降に展開されることとなる荷風文学の本質を読み抜くうえで、大きな力になったことは確かですね。

このように現地ニューヨークでしかできない調査や取材、研究を続けることの

なかで、私は『あめりか物語』に書かれてあることが、作り話でなくて、20世紀初頭のニューヨークを、低い目線で実にリアルに描きとっていることが見えてきた。ロンドンやパリといったヨーロッパの近代都市を凌駕する形で、20世紀型のウルトラ・モダン都市として、すさまじい勢いで発展するニューヨークの一番低いところで、日本人が生きていくということがどういうことなのかを、荷風は突き詰めて見据え、書いている。ところがその当時、刊行されていた荷風文学論や評伝には、ほとんどまったくといっていいほどニューヨーク時代の荷風は無視されていた……誰かが、ニューヨーク時代の荷風とその文学について、しっかり調査を行い、『あめりか物語』論を書かなければいけない。それが書かれない限り、荷風文学の本質が明らかにされることはない……そういう思いを抱いて、私は10年以上待ったわけですね。ところがニューヨーク時代の荷風について書く人は一人も出てこなかった。結局、仕方がない、誰も書かないのなら、自分が書くしかないということで、さきほど巽先生が紹介してくれた『永井荷風の見たあめりか』という連載を、女性誌の「マリ・クレール」に一年半ほど続け、連載が終わった後、同じタイトルで単行本を中央公論社から出版したわけです。幸いだったのは、当時はまだバブルの余韻が残っていて、本の定価が2,800円とかなり高かったのにもかかわらず、本は4,500部くらい売れ、朝日、読売、毎日新聞と主要全国紙の全部に書評が載り、私は、荷風と同じように新帰朝文学者として認知されるに至ったわけです。

ところが、『永井荷風の見たあめりか』を書き終え、単行本として刊行されたあとになって、ニューヨーク時代の永井荷風について書き残していることがまだまだ沢山あることに気づいて、2001年には青土社から『荷風とニューヨーク』を、2005年には『永井荷風の見たあめりか』を『荷風のあめりか』と改題して、後半部分をかなり書き足し、平凡社ライブラリーの文庫として刊行。それでアメリカにおける荷風については一通り書き切ったので、荷風から離れて夏目漱石のロンドン留学とか、森鷗外の日清・日露戦争体験、正岡子規の日清戦争従軍体験とかについて、それぞれ相当ボリュームのある本を２～３年に一冊というペースで書いていきました。さらに、400ページから500ページある文学評論の本を書き上げるには大変な労力と時間を取られ、書き上げたあと疲労困憊して半年くらい何も書けなくなるということを繰り返していたので、少し楽をしたいというのは変ですが、楽しみながら本を書きたいということで、2016年に実際には、ハ

ードカバーの本を書くのと同じくらい悪戦苦闘して『原節子、号泣す』を書き上げ、集英社新書として刊行。そして今日、私にとっては四冊目の荷風本に当たる『慶應義塾文学科教授 永井荷風』が、同じく新書として集英社から発行されたことで、永井荷風に再び帰ってきたわけです。私は、現在76歳で、死ぬまでに荷風に関してはあと最低5冊くらい単行本を書いておきたいと思っており、次に刊行予定の本のタイトルは『永井荷風牧神論』と決まっていて、原稿はすでに千枚近く書きあがっているので、今年の秋くらいには刊行に持ち込みたいと思っています。

さて私自身についての話はこのくらいにして、本日の登壇者のお一人である、持田さんは素晴らしい荷風文学評論家で、私の視点と重なるところがいくつもあって、これから先、お仕事をどう展開されていかれるか、大変楽しみに思っております。また、ピーター・バナードさんは泉鏡花、そして荷風文学を読んで日本語で論文を書いている、おそらくは初めての欧米の研究者であり、複眼的、かつクロスオーバー的な視野を持たれた素晴らしい才能だと思います。このようにこれまでの荷風文学研究者や愛好家とは一線を画したところで、荷風の文学を読み、荷風文学論に新機軸を打ち出そうとされているお二人と、一人老いてはいるものの、気持ちだけは若いつもりの私が集まり、巽先生と荻野アンナさんが参加されて、こういうシンポジウムが開かれるというのは画期的なことで、今後の荷風研究、荷風論の動向を変える画期的なシンポジウムになるだろうと私は期待しております。

持田叙子：今日は永井荷風を多角的に論ずる会にお声かけいただきまして、貴重な勉強の機会と存じております。荷風とは、高校生の時に岩波文庫で『墨東綺譚』を読んで出会いました。私が高校生の時は、岩波文庫で古今東西の名作を全て読まねばならぬと勝手に決意しておりました。岩波文庫で永井荷風という人も全然知らず、『墨東綺譚』も何かも知らずに、「永井荷風、『墨東綺譚』、読もう」と思いましたが、これがわかりませんでした。といいますか、玉の井が遊郭ということが全然読めておらず、すてきな美しい女性が登場するのだなと思っておりました。雨がザーと降ってくると「旦那、ちょっと私を入れてってよ」と傘に飛び込んでくる様子が鮮明でした。その後の色っぽい場面などはわかりませんでしたので飛ばして読みました。そしてお雪さんが氷白玉をとって荷風の一つの分身

である主人公と一緒に食べるとか、お雪さんがおたくあんでお茶漬けをさらさらっとかきこむ――それが、男の人の前でオドオドしないで自然な食欲をみせるのが、今でいえば大門未知子的で格好良いなと思って読んだのでございました。それが初めての出会いで、次に出会ったのは四十代のはじめに荷風と出会うこととなります。それはまた後ほど話させていただきます。

ピーター・バナード：巽先生からご紹介いただきましたが、私は荷風の専門家ではなくて、ただのアメリカの大学院生にすぎないので、あまりがっかりしないようお願いいたします（笑）。荷風との出会いは、自分の発表とつながっていますのでのちほど詳しくお話ししますが、初めて荷風を読んだのは、大学の近代日本文学通史の授業の教科書として読んだ、オックスフォード大学出版会の日本文学短編のアンソロジーの中の「牡丹の客」という短編でした。それを最初に読んで、それ以来他にも多少読んだのですが、つい最近までそんなにたくさん荷風を読んでいたわけではないです。どちらかというと怪談とか怖い話が好きなので、泉鏡花とかを読んでいたのですけれども、最近荷風もそういう文脈で読めるのではないかと考えまして、再び荷風に興味を持ち始めています。

コメンテーター　荻野アンナ：荻野アンナこと、金原亭駒ん奈と申します。永井荷風こと三遊亭夢之助の存在なくして、慶應の仏文は成立しませんでした。フランス文学と落語を同時に嗜む後輩として、荷風に関する興味深い逸話をひとつご紹介させていただきます。国文科の名誉教授である関場武先生がその頃は文学部長で、偶然学食でお会いしたらお鼻をグズグズいわせてらして、「いやー、花粉症が辛くてね。でも三田の文人には花粉症が多いってご存知？」。「いいえ」って答えたら「永井かふん」（笑）。「いやー、かぶんにして知りませんでした」。それでオチがつきました。